京都大学言語学懇話会
2019 年度 発表要旨

例会報告

第 109 回例会

日時・場所　2019 年 4 月 13 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目　「鮒が haQ-tor-u, 鮒鮨が haQ-tar-u
－滋賀県湖北方言のアクセントが異なる変種が共有するもの—」

脇坂　美和子 (神戸山手大学非常勤講師)

「言語の中と外——アイルランド英語、言語接触、時間と脳をめぐって」

嶋田　珠巳 (明海大学)

第 110 回例会

日時・場所　2018 年 7 月 13 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目　「チベット・ビルマ語派ルイ語群における歴史言語学上の諸問題」

藤原　敬介 (京都大学)

「スライアモン語のふたつの音声現象報告 – 超分節音素と母音の長さについて - 」

渡辺　己 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

第 111 回例会

日時・場所　2018 年 12 月 21 日(土) 13:30-16:45 於文学部校舎第二講義室

発表題目　「トカラ語文献研究の諸問題」

荻原　裕敏 (京都大学白眉センター・特定准教授)

「出雲方言と中央方言と日本祖語」

平子　達也 (南山大学)

鮒が haQ-tor-u, 鮒鮨が haQ-tar-u
－滋賀県湖北方言のアクセントが異なる変種が共有するもの－

脇坂美和子

発表要旨

滋賀県湖北地方は、近畿地方と北陸、中部地方との方言境界に位置し、その方言には数種のアクセントが混在している。一方でこの方言のアスペクト形式や待遇表現などには、広域にわたって共通の形式が残存している。しかしいずれもその詳細については明らかになっていない。湖北方言の記述を行うことは、異なる方言アクセントが接触する地域で、言語コミュニティはどのように変容し得るのかを探る上で、重要な資料となり得る。

本発表では、湖北地方のうち旧湖北町地域に分布する二つの変種について、アクセントの違いを確認した上で、他の言語学的な性質をどの程度共有しているかについて記述と分析を行った。

これらの変種は、人称、有生性、待遇関係に特徴的な性質を示す 5 種の存在動詞とこれを語彙資源とするアスペクト接辞の性質を共有するほか、音韻プロセスについても、アスペクト接辞に先行する動詞の語幹末に重子音が現れる点などにおいて、共通点が観察される。一方で、この方言のノダ文にあたる /=(na)N=ja/ が、語末のコピュラの有無とアクセントの平板化によって認識と伝達のモダリティを区別する点に関しては、一方の変種でのみ報告されている。

また、湖北方言の/-tar-/形式は、存在動詞の/ar-u/の有生性に関わる共起制限を受け継いでおり、自動詞にも用例が見られ、アスペクト接辞としての機能も他のアスペクト形式と並行的である。これらの性質は、共通語の/-te-ar-u/形式の用法を考察する上でも重要な示唆を与える。さらに/-tar-/形式に見られる有生性の共起制限は、この方言話者が共通語を用いる際の/-te-ar-u/形式に転移しており、文法範疇の方言形式から共通語への転移として興味深い現象である。

このように、湖北方言の言語記述は、方言（変種）間の接触や日本語共通語の通時的研究にも寄与するものであり、さらに記述と分析を進めたい。

（わきざか　みわこ）

言語の中と外——アイルランド英語、言語接触、時間と脳をめぐって

嶋田 珠巳

「言語」を理解しようとするとき、とくにそれを話す人があっての言語を考えるとき、言語の体系（言語の「中」）を分かっていくことと言語をそれをとりまく環境（言語の「外」）との関係において分かっていくことの両方が必要である。アイルランド英語の文法調査では、話者の言語意識に言語形式の社会的関与性を見ることも少なくない。接触による言語変化の検討においても、コミュニティ環境の時系列的把握は言語に起こる事象の理解をたすける。翻って、時間に関する複合領域プロジェクト（時間生成学—時を生み出すこころの仕組み）においては、「時間と脳の問題に言語学はどう関わるのか」という問いに直面する。脳は言語の「外」でありながら、言語知識の形成・維持および言語使用を可能にするという意味においては言語の「中」と密接な関わりをもつ。

以降は「アイルランド英語の中」の「*'tis*...文にみる言語接触」セクションの要旨として：アイルランド英語の*'tis*....文はこれまでの研究において分裂文として記述されてきたものであるが、標準的な英語の分裂文が焦点の統語的な表現であるのに対して、アイルランド英語の*'tis*....文はそうではない。アイルランド英語体系における諸要素の検討から*'tis*....文の構成と機能を解き、アイルランド語 *IS* 文とのおもに情報構造上の共通性に着目して、アイルランド英語が情報構造に関する文法的対立をアイルランド語から引き継いでいることを論じた。アイルランド英語形成期の文例には*'tis* とアイルランド語 *is* の混交も見られ、現代の*'tis*....文に通ずる構造と機能が見出せる。*'tis*...文は、接触のなかにある二つの言語の、形と機能の似た文パターンが収束して新たに機能を整えたものとしてとらえられる。アイルランド英語には英語系クレオール諸語と英語方言の連続体という観点からの議論もある。アイルランド英語の*'tis*...文の検討を通して、「内的一般化」の意義をたしかめ、言語接触による文法形成の一つのモデルを示した。

（しまだ　たまみ）

チベット・ビルマ語派ルイ語群における歴史言語学上の諸問題

藤原　敬介

チベット・ビルマ語派ルイ語群（Luish group, Tibeto-Burman）とは、チャック語（ISO 639-3 chk; Cak/Sak; バングラデシュ・チッタゴン丘陵、ビルマ・ラカイン州）、カドゥー語（ISO 639-3 zkd; Kadu; ビルマ・ザガイン管区）、ガナン語（ISO 639-3 zkn; Ganan; ビルマ・ザガイン管区）、チャクパ語（Chakpa; インド・マニプール州）等からなる言語群である。本発表では、（1）「ルイ」という名称の問題、（2）ルイ祖語（Proto-Luish: PLu）の韻母の問題、（3）ルイ語群の下位分類、という三点をあつかった。

（1）については、「ルイ」が本来はチャクパ人に対する蔑称ともとれる語であることから、ルイ語群の諸言語の自称である SAK という形式をもちいるのがのぞましいという見解を紹介した。SAK は古代ビルマの碑文にもあらわれる民族名であり、地名にも類似した形式が散見される。ただし、地名としての SAK は、タイ系言語にみられる樹木のチークと関連があり、民族名との関係は不明である。人間や身体をあらわす語彙がしばしば自称となることから、民族名としての SAK は、身体部位と関係があるかもしれないことをのべた。

（2）については、チャック語の二種類の中舌母音/ɨ/と/ɯ/の来源、そしてガナン語の音節末閉鎖音付加について検討した。前者については、祖語や借用元の言語における i が/c, j, r, s/のあとで/ɨ/に、o が/ɯ/になる傾向があるほか、/ɨŋ/がルイ祖語の*yum に由来する傾向にあることがわかった。しかし、その他の条件についてはわからないままである。後者については、ルイ祖語として*iy が再構でき、高声調ではないばあいに、二次的に声門閉鎖音が付加されるという条件をあきらかにした。

（3）については、ルイ語群にみられる 11 の特徴（1. PLu *ti > kyi となる、2. PLu *r が消失する、3. PLu *khy > ʃ となる、4. 借用語動詞の標識がある、5. PLu *-l > n となる、6. 接中辞がある、7. PLu *ɓ > m である、8. PLu *ɗ > l である、9. PLu *khri > c^hi である、10. 自称が Sak の類である、11. 開音節の高母音のあとで閉鎖音が付加する）を根拠に、系統樹の作成をこころみた。そして、どの特徴を重視するかによって分類の仕方はかわるという問題があることをしめした。

（ふじわら　けいすけ）

スライアモン語のふたつの音声現象報告 − 超分節素と母音の長さについて −

渡辺己（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

2019-07-13
京都大学言語学懇話会第 110 回例会

発表要旨

本発表では，発表者によるスライアモン語の現地調査から音声・音韻的現象について報告した。スライアモン語は，カナダ，ブリティッシュ・コロンビア州において話されている，いわゆる北アメリカ先住民諸語のひとつであり，系統的にはセイリッシュ語族に属する言語である。

本発表者が調査を始める前のいずれの先行研究でも，スライアモン語のストレス（あるいは他の超分節素）は弁別的ではないとされてきた。確かにほとんどの音環境では弁別性はないようであるが，若干の環境では弁別的であり，最小対もある。これについては，Watanabe (2003)ですでに記述をおこなったが，本発表では，Praat でそのような最小対を観察した。

さらに，限られた環境において，母音の長短のみで弁別されている最小対が見つかった。スライアモン語では，母音の長短は弁別的ではないはずであり，対立が見つかった環境もごく限られている。Watanabe (2003)では当時見つかっていた 2, 3 の例があることだけを報告したが，その後の調査でさらに例が見つかった。具体的には，C_1VC_2 語根に状態アスペクト接尾辞 *-it* が付き，さらに，指小性を表す C_1V 重複法が施された形式と，複数を表す C_1V 重複法が施された形式は，いずれも C_1V~C_1C_2-it となる。（語根の元の母音は落ちる。）この時に，これらふたつの形式は，音素の並びとストレスやピッチなどは同じであるが，最初の母音の長さだけに差が見られる。指小性の方は最初の母音が短く，複数の方はそれに比べて長い。何故このような差があり，対立を見せるのかは未だ分かっておらず，今後の調査・研究が必要である。

記述されていない，あるいはそれが不十分な言語の調査においては，まず基礎語彙を集めつつ音素を立て，その後，形態論，そして統語論へと進むかのように考えられることがあるが，本発表で報告した現象はいずれも，形態法の調査が進んでいったなかで初めて分かったことである。言語調査は，音声・音韻論，形態論，統語論などを行ったり来たりしながらしか進められないものである。

（わたなべ　おのれ）

京都大学言語学懇話会第 111 回例会 2019/12/21(土)於京都大学
タイトル:トカラ語文献研究の諸問題
発表者:荻原裕敏(京都大学白眉センター・特定准教授)

トカラ語は十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・日本等の列強諸国によって派遣された、中央アジア探検隊が発掘調査の過程で獲得した出土資料より知られる文献言語であり、印欧語内部においてトカラ語 A 及びトカラ語 B と称される二つの言語より成るトカラ語派を形成する。現在のところ、直接の後裔と見做し得る言語は知られていない。トカラ語資料は、中国新疆ウイグル自治区のクチャを中心にショルチュク・トゥルファンの仏教遺跡で主に発見されているが、この地域はインドから伝わった仏教を受容したため、トカラ語文献はブラーフミー文字で書写されており、残された資料も大部分が仏教文献に属する。

この言語による文献は、文字類型と歴史的背景から 5-11 世紀頃に成立したと推定されており、イスラム化以前の新疆地域において、トカラ語 B は亀茲国の、またトカラ語 A は焉耆国の言語であったとされる。インドより伝えられた仏典に基づき成立したトカラ語仏典は、その後ソグド語や古代ウイグル語などに翻訳され、周辺地域の諸民族の仏教に影響を及ぼした。中でも、古代ウイグル語に見られるインド語由来の借用語の多くはトカラ語を媒介としていたとされ、これらの古代ウイグル語の仏教術語はモンゴル語・満州語に伝えられたため、その痕跡をこれらの言語に留めている。

本発表では、トカラ語 B の語源辞書として知られる Douglas Q. Adams (2013) *A dictionary of Tocharian B. Revised and greatly enlarged*. 2nd ed. (Amsterdam/New York: Rodopi) に収録された語彙・文法形式の内、主に発表者による文献学的研究に基づいて、修正・削除或いは追加されるべき語彙・語形等を紹介すると共に、トカラ語研究の今後の諸課題を示した。

（おぎはら　ひろとし）

懇話会要旨

出雲方言と中央方言と日本祖語

平子達也（南山大学）

本発表では，島根県東部の出雲地域で話される出雲諸方言の通時的・共時的観点からの精密な記述が，日本列島の諸言語・諸方言を対象とした比較歴史言語学的研究に貢献をもたらしうることを述べた。具体的には，以下の2つの事例を取り上げた。

（1）出雲諸方言と中央方言とを比較すると，語頭位置などの特定条件下で，出雲諸方言の半狭母音/e, o/が中央方言の狭母音に対応することが分かる。この音対応からは，出雲諸方言の先史において，狭母音の半狭母音化（*i > e，*u > o）が起こったと推定される。しかしながら，「薬」を表す出雲方言の/kusoo/という形式においては，出雲方言で半狭母音化が起こったとは考えられないにもかかわらず，中央方言のuに/o/が対応している。先行研究では，琉球諸方言と古代中央方言との対応から，それらの共通祖語の段階に*kusori「薬」という形式が再建される。種々の根拠から出雲方言の/kusoo/に見られる半狭母音/o/は，この祖語の*oを保存したものと考えられる。

（2）出雲地域の北西部に位置する大社町周辺の方言は，特定環境下で2拍名詞4類と5類との間にアクセントの対立があることが知られている方言である。大社町周辺方言のアクセントが発見される以前は，2拍名詞4類と5類のアクセント上の対立は中央方言と地理的に連続した地域にのみ見られるものとされてきた。そのため，その対立を中央方言において二次的発生したものとする見方もあったが，大社町周辺方言のアクセントの存在によって，2拍名詞4類と5類のアクセント上の対立が祖語にまで遡る蓋然性が高いことが示された。発表者は，出雲地域全体における2拍名詞4類と5類のアクセントの地理的分布を精査し，大社町周辺方言における2拍名詞4類と5類のアクセント上の対立が，史的変化によってもたらされた見かけ上のものである可能性を指摘した。

（ひらこ　たつや）